

# CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.153 January, 2022

## 目次

### 〈オンラインイベントのご案内〉

「気候危機で変わる世界」(配信延長) .....	1
〈CAPS新メンバーの紹介〉 .....	1
〈アジア太平洋研究センター叢書 新刊の紹介〉	
Music in the Making of Modern Japan: Essays on Reception, Transformation and Cultural Flows	
文学部 教授 日比野 啓 .....	2
〈研究紀要『アジア太平洋研究』46号刊行〉 .....	3

### 〈CAPS企画の報告〉

「平成の宰相たち：指導者16人の肖像」	
CAPS ポスト・ドクター 鄭 康烈 .....	4
ラウンドテーブル「アジア太平洋研究センターの未来を考える」 CAPS主任研究員 小松 寛 .....	6
〈シリーズ 本を読む〉	
『生命科学クライシス—新薬開発の危ない現場』	
理工学部 教授 清見 礼 .....	7
〈CAPS活動報告〉 .....	8

## オンラインイベントのご案内

オンラインイベント「気候危機で変わる世界」が好評につき配信期間を2022年2月末日まで延長しました。お申込みは無料、視聴方法など詳細についてはCAPSウェブサイトにてご確認ください。

成蹊大学アジア太平洋研究センター・朝日新聞共同企画  
朝日新聞ジャーナリストと成蹊大学の専門家によるオンライン講演会

2022年2月末日まで  
配信期間延長

気候危機で変わる世界

講演者  
朝日新聞編集局長補佐 稲田 信司  
成蹊大学経済学部教授 財城 真寿美

司会  
成蹊大学法学部教授・CAPS所長 高安 健将

講演内容  
稲田 信司 ◆世界における気候危機  
◆気候安全保障とは？  
◆米国、中国、英国そして日本の戦略

財城 真寿美 ◆世界の気候変動  
◆眞鍋淑郎博士(気候学)のノーベル物理学賞受賞  
◆日本の気候変動

視聴無料  
先着500名

オンデマンド配信期間  
2022.2.28迄延長！  
お問合せ ☎0422-37-3549 E caps@seikei.ac.jp

成蹊大学

【出演者】 朝日新聞 編集局長補佐 稲田 信司  
成蹊大学 経済学部教授 財城 真寿美

【司会】 成蹊大学 法学部教授・CAPS所長 高安 健将

### 【講演内容】

- 稲田 信司 ◆世界における気候危機  
◆気候安全保障とは？  
◆米国、中国、英国そして日本の戦略
- 財城 真寿美 ◆世界の気候変動  
◆眞鍋淑郎博士(気候学)のノーベル物理学賞受賞  
◆日本の気候変動

ディスカッション

## CAPS新メンバーの紹介

2021年12月1日より、当センターのポスト・ドクターに鄭康烈が着任いたしました。



**鄭康烈**：2021年12月よりポスト・ドクターとして着任しました。これまでは国際社会学を専攻する者として、国境を越えて移動する人たちやその家族をとりまく様々なテーマ(移民の社会階層、内的多様性、コミュニティ、人種主義、植民地主義など)に関心を向けつつ、日本でフィールド調査を進めてきました。これからCAPSの一員として様々な企画・研究活動に携われること、とても嬉しく思います。

## アジア太平洋研究センター叢書 新刊の紹介

Kei Hibino, Barnaby Ralph, Henry Johnson 編著

*Music in the Making of Modern Japan: Essays on Reception, Transformation and Cultural Flows*

Palgrave Macmillan, 2021/8/30

文学部 教授 日比野 啓

2016～18年度にかけて実施されたアジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「アジア太平洋地域における情動メディアとしての西洋音楽の影響」の成果物として、*Music in the Making of Modern Japan: Essays on Reception, Transformation and Cultural Flows* (『近代日本を作った音楽：受容・変容と文化の流れについての試論』)を2021年にPalgrave MacMillanから刊行しました。編者は日比野啓(プロジェクト責任者、文学部教授)、バーナビー・ラルフ(サブ責任者、文学部教授)、ヘンリー・ジョンソン(ニュージーランド国立オタゴ大学パフォーマンス・アーツ学部教授、研究分担者)の三人。この三人にくわえて、本プロジェクトで研究発表を行った五名が執筆者として名を連ねています。構成は以下の通りです。

### 第一部 Reception (受容)

大友彩子 “Western Art Music in Pre-Edo and Meiji Japan: Historical Reception, Cultural Change and Education” (江戸以前から明治期日本における西洋の芸術音楽：歴史的受容、文化的変化と教育)

ヘンリー・ジョンソン “Western Musical Elements in Japanese Koto Music: Affective Media in Sonic, Visual and Behavioural Context” (日本の箏曲における西洋音楽の要素：音響的・視覚的・行動的文脈における情動メディア)

ガヴィン・カーフォート “Guitar Making and Intercultural Communication in Japan and Australia” (日本とオーストラリアにおけるギター製作と文化間コミュニケーション)

### 第二部 Transformation (変容)

バーナビー・ラルフ “Black Intentions: Ishii Maki, Hirose Ryōhei, Shinohara Makoto and the Japanese Avant-Garde” (ブラック・インテンション：石井眞木、廣瀬量平、篠原眞と日本の前衛)

日比野啓 “Scarlett, an American Musical Made in Japan; or, How Japanese Learned to Stop

Worrying and Love Integrated Musicals” (『メイト・イン・ジャパンのアメリカン・ミュージカル『スカーレット』、または、いかに日本人は心配するのを止めて統合ミュージカルを愛するようになったか』)

源中由記 “‘Like Some Cat from Japan’: Sukita Masayoshi’s Photographs of David Bowie as Japan’s First Appearance in the History of Rock Music” (『日本からきた猫のように：ロック・ミュージックの歴史における日本の初お目見えとしての鋤田正義によるデヴィッド・ボウイの写真』)

### 第三部 Cultural Flows (文化的流れ)

マイケル・プロンコ “The Flow of Jazz in Japan: Why Jazz Resonates so Far from Home” (『日本におけるジャズの流れ：なぜジャズは本国から遠く離れて鳴り響くのか』)

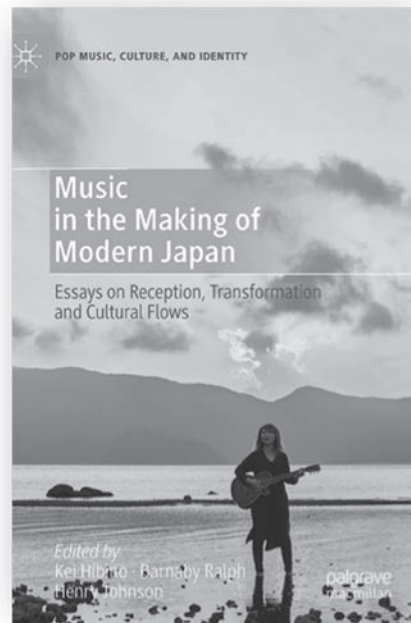
バーナビー・ラルフ (米窪絵美と芹田珠奈へのインタビュー) “Juna’s Groove and Emi’s Beat: Women and Popular Music in Modern Japan” (珠奈のグルーブと絵美のビート：現代日本における女性とポピュラー音楽)

大友彩子・佐藤綾 “Manufacturing Identity: Femininity, Discourse and Representation in Japanese Popular Music” (『アイデンティティの捏造：日本のポピュラー音楽における女性性、言説および表象』)

各部の章立てと論文の題名から推測できるように、本書の主題は、音楽や演劇といった西洋の上演芸術 (performing arts) の様式や楽器、感性や美学が、アジア太平洋地域の文化にどんな影響を与えたか、またそれらをアジア太平洋の各地域がどのように受容し、「消化」してどのように変容させていったか、さらにそれらが逆に西洋の各地域にどんなふう「逆流」していったか、ということです。

第一段階「受容」は19世紀から20世紀初頭に、第二段階「変容」は第二次世界大戦終了後に、そし

て第三段階「文化的流れ」は1980年代以降のグローバリゼーションに伴って起きたと私たちは考えています。また、同種の研究書は他にも例がありますが、本書の特徴はこのような三段階を情動メディアとしての音楽、という面に注目して論じたことです。「情動」(affect)は昨今の批評理論で取り上げられることが多い概念です。単純化を恐れずにいえば、「心」の中で生じるとされる「感情」(emotion)のかわりに、身体的変容をもたらす「もの」、物理的に観察され得る「現象」として定義されるものが情動です。音楽はただ「楽しい」「心地よい」と感じるだけでなく、私たちの身体や行動に働きかける情動性を持っている。そして実際に西洋音楽によって、私たちアジア太平洋地域の世界や文化は変えられてきたのだし、私たちの音楽が西洋を変えていくことがある。そのような共通認識のもとで九本の論文は書かれています。



## 研究紀要『アジア太平洋研究』46号刊行

『アジア太平洋研究』の最新号(46号)が刊行されました。今回は巻頭にCAPS主催企画「ポピュリズムを考える」を、特集として朝日新聞国際報道部共同企画「コロナ時代の世界」を掲載しております。

### 目次

#### [2020年度 アジア太平洋研究センター主催企画より]

ポピュリズムを考える 板橋 拓己

#### [特集：コロナ時代の世界 (朝日新聞国際報道部共同企画)]

コロナ後の欧州はどこに行くか—地域大国の脅威と足元の陥穽— 国末 憲人

パンデミック下のイタリア—政治・社会の変化と対中関係— 河原田 慎一

新型コロナウイルス禍が中国共産党政権に与えた政治的影響 西村 大輔

中国本土の新型コロナウイルスへの対応—感染ゼロ政策への道筋とその実態— 平井 良和

トランプ主義は「原因」だったのか、それとも「結果」なのか

—ジャーナリストとして見た新型コロナ時代の米民主主義の変容— 沢村 亙

米中デカップリングの虚実 吉岡 桂子

#### [パイロット研究報告]

ロシアの愛国主義と自国史像—マンネルヘイムの記念彫刻をめぐる論争— 立石 洋子

ヒ素超蓄積植物モエジマシダバイオマスを利用した新規環境浄化資材の開発 菅原 一輝

次世代電池用 Si 負極の創製へ向けた Li-ナフタレニド溶液による

Li プレドープ技術の開発 齋藤 守弘

#### [投稿論文]

戦前期へのノスタルジア—作家野上弥生子と「北軽もの」— 岩瀬 みゆき

The Moderating Effect of Compulsory Citizenship Behavior Pressure on the Attitudinal Factors and Organizational Citizenship Behavior Relationship Yutaka Ueda

## CAPS 企画の報告

### 「平成の宰相たち：指導者16人の肖像」報告

CAPS ポスト・ドクター 鄭 康烈

本講演会は平成という時代の指導者たちを振り返り、これから先の時代を見通すヒントを得ようとする趣旨で、2021年6月25日に収録、7月1日より配信された。会では高安健将所長が司会を務め、東京大学・青山学院大学名誉教授の渡邊昭夫氏、朝日新聞編集委員の秋山訓子氏、上智大学教授の宮城大蔵氏の三名が報告をおこなった。

#### ① 宮澤喜一と平成政治

まず、渡邊昭夫氏が「戦後史の中の平成——時代と人と」という題で報告をおこなった。渡邊氏は平成の略年表を示しつつ、アメリカ同時多発テロや東日本大震災に象徴されるこの時代の特徴を、「激動の時代」という言葉で表した。激動の時代の舵取りを任せられる指導者の視点に立ったとき、平成という時代は同時に「模索の時代」であったともいえる。そしてこの模索を代表する人物として言及されるのが、宮澤喜一首相である。

渡邊氏は、宮澤本人と対談した過去の経験も紹介しつつ議論を進める。いわく、宮澤が指導者として生涯取り組んだ課題は、保守政党と革新政党が牽制しあう55年体制のなか、いかに両陣営の均衡を保ちつつ日本の進路を定めていくかであったという。

平成の時代に政権を担ったその他の宰相についての見解へと論を進める渡邊氏は、この時代に印象深い人物として橋本龍太郎と安倍晋三の名前を挙げる。両者の共通点は、決然とした思いで日本を引っ張ったというその決断力に求められる。とりわけ「日本を取り戻す」というスローガンのもと戦後政治の総決算に取り組んだ安倍晋三は、55年体制下で模索の時代を歩んだ宮澤喜一と対照的である。両者の比較は、今後の日本政治を考えるうえで有意義な発見を引き出せるのではないかと考えた。こうした問題提起をしつつ、渡邊氏は報告を締めくくる。

#### ② 記者がみた平成の首相たち

次に、「平成の宰相たち——間近に接した首相の素顔」という題のもと、秋山訓子氏による報告がなされた。朝日新聞政治部でいわゆる「総理番」や自

民党担当の記者を務めた秋山氏は、平成を主導した首相たちの素顔を紹介する。

まず、秋山氏は橋本龍太郎首相の印象を、政策がシャープで議論好き、育ちがよくて人を魅了する笑顔をもった人物だったと振り返った。総理番として自身が直接橋本に質問をした際のエピソードも披露し、記者に対して気遣いを忘れない彼の人柄についても触れた。

次に、小淵恵三首相を「成長する首相」と形容し、在任期間中における彼の政治家としての豹変ぶりについて語った。同時に、権力に対する執着が強い面も、小淵は兼ね備えていたという。

対照的に、政治家らしからぬ、爽やかで気持ちのいい人物として小泉純一郎首相について評した。小泉は一見すると徒党を組まず裏表もないようにみえたが、清和会の出身者として経世会の権力の基盤となっていた郵政に改革のメスを入れるなど、派閥的な側面も持っていた。

続いて野田佳彦首相について、彼が既得権益の解消など統治機構の在り方に関心を示したことは事実であるものの、憲法改正などには意欲をそれほど示さず、政策的に特段やりたいことがあったわけではなかったのではないかと見解を述べた。他方、彼は演説が巧みで、オーソドックスでありつつも言葉の力を信じた政治家でもあった。

最後に、安倍晋三首相について秋山氏は、第一次から間を空けて第二次内閣を発足した際の彼の変化について言及し、第一次内閣として政権を握った際の苦い経験への十分な反省が、のちに「官邸主導」の政治システムのある種の完成として結実したと考察した。

#### ③ 歴史としての平成日本政治

続いて、宮城大蔵氏による報告がなされた。宮城氏はまず、平成日本政治の時期区分として、①「55年体制の終焉～小泉純一郎首相前夜：「政界再編」の時代」、②「小泉登場から政権交代まで：自民党内の「政権交代」、③「民主党政権の「失敗」と「安倍一強」」の三つを設定し、これに沿って平成政治の特徴を述べる。①の時期は、55年体制後におけ

る野党両陣営による連立先の模索に特徴づけられる。民主党が勢力を増したことで二大政党制の様相がはっきりするのが、②の時期である。③の時期は、民主党政権の失敗を意識する安倍政権の一強体制に特徴づけられる。

さらに、宮城氏は平成の指導者像の系譜を、(A) 自民党内の「保守本流」、(B) 清和会の流れ、(C) 非自民の三つに整理する。「吉田ドクトリン」の平成バージョンとも呼べる(A)の流れを汲むのが、橋本龍太郎および小淵恵三両首相である。(B)の流れに位置づけられるのは小泉純一郎、福田康夫、安倍晋三であるが、前二者は安倍政権ほど歴史認識や憲法改正といったテーマにこだわりをもっていたわけではない。(C)の流れは、鳩山由紀夫、菅直人、野田佳彦といった非自民の路線である。(B)の流れが力を持ち、(A)および(C)の流れが見えづらくなる事態が現代では生じているが、政治の場における議論の幅や多様性を確保することが、権力側にとっても望ましいと宮城氏は報告をまとめた。

#### ④ ディスカッション

講演会後半では、高安所長が各報告者に質問を投げかける形でディスカッションが展開された。議論の内容は多岐にわたったが、そのうちのいくつかを紹介したい。

まず取り上げるのは、安倍政権をいかに捉えるかというテーマである。これに対して渡邊氏は、「模索の人物」としての宮澤喜一と対比し得る「決断の人物」としての安倍晋三について再び言及し、両者の違いがそれぞれの時代における日本の国際的地位の変化によってもたらされたとした。また宮城氏は、第二次安倍内閣が政権を握った7年8か月がちょうど東日本大震災とコロナ禍の間に位置するとし、この人物が相対的に恵まれた安定期に政治を主導できたことを押さえつつ、政権がこの期間をどのように使ったのかを問う必要があると述べた。

また、政治における言葉の価値の変化というテーマについて、秋山氏は近年のSNSの普及と政治家によるその利用について言及した。米国のトランプ元大統領に象徴されるように、昨今ではtwitterなどで政治家が自身の固定的なファンに向け言葉を大バーゲンのように安売りする事態がみられるとして、過去の状況からの変化をまとめた。



配信画像より：

(左上) 渡邊昭夫名誉教授 (右上) 宮城大蔵教授  
(左下) 秋山訓子氏 (右下) 高安健将所長

次に、政治の幅の確保というテーマに関連して宮城氏は、1960年代ごろまで勢力を伸ばした社会党がいずれかの局面で政権を取っていれば、アジアの近隣諸国との関係も含めて、より幅のある政治が実現されていたのではないかと見解を示した。

アジア太平洋という枠組みからみた政治について、渡邊氏はAPECやTPPの基礎となる枠組みが池田勇人首相によって構想され、その流れを汲む大平正芳首相によって実現された経緯について解説した。宮城氏は戦後日本の二本柱として安全保障体制の強化と地域主義があるとし、地域主義が安全保障化する近年の傾向に危惧を示しつつ、本来日本が持つ強みや価値を活かしたより生産的な途を模索すべきだと主張した。

ここまでの流れを受けて秋山氏は、アジア太平洋に沖縄を含めつつ、平成の指導者たちの沖縄に対するまなざしについて問題提起をおこなった。宮城氏は安倍晋三首相および菅義偉首相と沖縄との冷え込んだ関係性について、天皇の存在にも言及しつつ自身の見解を述べた。また、渡邊氏は沖縄と自身との切っても切れない関係性について、自身の家族史を披露しつつ議論をまとめた。

企画趣旨の「平成の時代を主導した宰相たちを振り返る」という枠内に留まらず、議論は戦後政治の総括にまで及んだ。ここでやはり浮かび上がるのは、55年体制下の振り幅のある政治を前に、逡巡を続けた宮澤喜一の姿である。そこには、政治の進むべき道があたかもたった一つしかないように語られる現代の状況を内省的に捉えるためのヒントがあるのかもしれない。今回のCAPS主催講演会も、多様な論点を含む充実したものとなった。

## ラウンドテーブル「アジア太平洋研究センターの未来を考える」

CAPS 主任研究員 小松 寛

今年、アジア太平洋研究センターは創設40周年を迎えた。当センターはこれまで①研究プロジェクトへの助成、②研究成果の刊行、③国際的な学術交流、④シンポジウム・講演会・映画上映会などの開催、⑤資料の収集といった活動を通して、成蹊大学における学術研究活動の最前線を構成する拠点のひとつとなってきた。

この40年という区切りを契機として、これまでのセンターの足跡を振り返りつつ、これからのセンターの在り方について語り合うことを目的として、11月6日にラウンドテーブルが開催された。本会には現職の所長・所員のみならず、亀嶋学園長を含む所長経験者、研究プロジェクト実施者、シンポジウム開催者などセンター内外の縁ある方々が参加した。そこでは当センターの担ってきた役割や今後の課題について、多様な立場と経験にもとづいた活発な議論が行われた。

参加者は以下の通りである。亀嶋庸一(成蹊学園学園長)、井上智夫(経済学部教授)、永野護(経済学部教授・CAPS所員)、清見礼(理工学部教授・CAPS所員)、久富寿(理工学部教授)、遠藤不比人(文学部教授)、川村陶子(文学部教授・CAPS所員)、今井貴子(法学部教授・CAPS所員)、李静和(法学部教授)、高安健将(法学部教授・CAPS所長)。

はじめに、亀嶋学園長より40年前のセンター設立の経緯について語られた。「大学には研究所が必要不可欠」という声があがり、センターの設置が実現したという。「アジア太平洋」という名称も当時は珍しかったが、現在では一般的となっており、時代を先取りしていたと言える。アジア太平洋研究センターは成蹊大学における国際化の拠点でもあり、その重要性は益々増していることが指摘された。

次に所長経験者、プロジェクトおよびシンポジウム経験者よりセンターが果たして来た役割や今後の課題について意見が出された。センターの役割については、目先の結果にこだわらず、研究そのものに忠実というセンターの特長や、センターの支援を受けて国際シンポジウムを開催できた実績、海外からの客員研究者による高い評価、中学高校の教員との連携した研究プロジェクトの実施、

理系から文系まで幅広い分野をカバーしている点での利便性の高さ、若手研究者の育成とそのネットワークの形成、そして事務スタッフを含む熟成したシステムなどが挙げられた。

課題としては所長と所員の役割分担や、企画の対象が市民、学生そして研究者と多様なため、どのような方針を採るべきかというジレンマなどが指摘された。今後は経済学分野の企画や、研究プロジェクトの内容を市民向けイベントとして開催することによるアウトリーチ、武蔵野市を始めとする地域への貢献、コロナ禍で始められたオンラインイベントの継続、研究成果の発表方法の多様化、紀要『アジア太平洋研究』の位置づけなどについて検討し、その拡充を図ることが議論された。

最後に高安所長より「寛容で自由な研究の場をファースト・プリンシプル(第一原則)に」との方針が提示、確認されて閉会となった。本会から得られた知見は、当センターが変動著しい現代社会に対応していく上で至要であり、今後のセンターの活動および運営に際しての重要な指針になると思われる。



## シリーズ 本を読む

『生命科学クライシス—新薬開発の危ない現場』  
(リチャード・ハリス (著)、寺町 朋子 (訳)、白揚社、2019年)

理工学部 教授 清見 礼

冒頭から、注目を集めるような医薬研究で再現性のあるものはほとんどない、という衝撃的な話が飛び出し、この再現性の無さを軸に生命科学分野の様々な問題点について述べられていく。

セル、ネイチャー、サイエンスといった一流雑誌に載った研究の再現性がほとんどないという話を聞いてまず、「そこまで分野として不正が横行しているのか」というような印象を持った。いくつか日本でもニュースなどでも騒がれた不正などを知っていたし、日本分子生物学会が研究倫理に関する声明を出したという話も聞いていたからである。もちろん、本書でも明らかな意図を持ったと思われる研究不正についても述べられている。

しかし、本書の多くの部分はそのようなあからさまな不正の意図を持ったもの以外の、構造的な問題が解説されている。実験動物に起因する問題とか、シャーレの中で細胞が他のものに置き換わってしまう問題など分野固有のものも紹介されているが、そういったもの以外にも、データを扱う研究であるのに統計学の理解が不十分であることに起因する問題であるとか、研究の内容より論文の本数やインパクトファクターが人事評価で注目されること、丁寧な研究をしていると研究費獲得競争で不利になる構造など多くの分野に共通しそうな話題も挙げられており、そのような問題を改めて考えるきっかけになるような内容である。

最近では理系・文系を問わずデータを用いた研究というのは様々な場所で行われており、本書で述べられているような問題はどの分野で研究を行うにしても多かれ少なかれ出てくるのではないだろうか。また、研究に対してどのような倫理的な態度で臨むべきかとか、とても些細なことに見え見落としがちなことや、分野の研究者たちが当たり前に行っていることにも落とし穴が色々潜んでいるといった示唆に富んだ話もあり、これから研

究をスタートしようとしている学生の皆さんに是非読んでもらいたいと思える内容であった。

一方で、生命科学分野の研究には多額の研究費が必要でかつ分野全体に配分される予算が決まっ

ているため、どうしても研究費の獲得競争になり、他の研究者より早くインパクトのあるように見える論文を書かなくてはいけないとか、そのような状況でたとえ不正でなくても自分の論文の間違いを認めにくい環境であるとか、ポストドクから正規職につける人の割合が少なく、かつ人事評価では論文の本数がものをいうので丁寧な研究より、とにかく数を出さなければなら

なというような、研究者として読むととても生々しい内容にも多くのページが割かれている。研究費がそこまで必要ないなどの違いはあるかもしれないが、これも多くの分野でそのまま当てはまる問題なのではないだろうか。本書では、このような問題に向き合い、改善を試みる動きなども紹介されている。ただ、正直なところそれに関しては、著者はある程度の希望を持っているのかもしれないが、読んだ感想としては解決には程遠い印象を受ける。とてもむずかしい問題であるが、これを解決しないと科学そのものが健全性を維持できなくなるという危機感が伝わってくるし、他の分野の話として眺めるという態度ではなく、自分も考えていかなくてはならないと思わせる内容である。そういう意味では、現在すでに研究者として研究を行っている先生方にも是非ご覧になって頂き、問題を再認識していただきたいと感じる。

本書は原著が2016年に書かれたものだが、それ以降でも行動経済学の複数の有名な結果に再現性がないというような話が聞こえてきたり、やはり様々な分野で似たような問題があるのではないかと思う。明確な解決策が示されているというわけではないが、問題点を認識するという意味では本書はよい出発点になるのではないかと思う。



## CAPS 活動報告 (2021.9.16 ~ 2021.12.15)

### 1. 公開講演会、研究会等

CAPS 設立 40 周年記念オンライン講演会  
「北東アジアと『近代』の出会い：多様性と独自性」  
＜オンデマンド配信・登録制＞

期 間	2021年9月24日(金)～2022年1月31日(月)
対 象	一般の方先着300名(好評につき500名へ変更) 登録者数：322名(12月15日現在)
出 演 者 (敬称略)	<p>【前半】 「対馬と異国船—来着と渡航」 報告者：石田 徹 (島根県立大学 国際関係学部 准教授) 討論者：遠藤 誠治(成蹊大学 法学部 教授)</p> <p>「朝鮮におけるアナーキズム的近代」 報告者：山本 健三 (島根県立大学 国際関係学部 教授) 討論者：黒川 伊織 (神戸大学大学院 国際文化科学研究科 協力研究員)</p> <p>【後半】 「近代中国における法学の受容—穂積陳重と梁啓超」 報告者：李 暁東 (島根県立大学 国際関係学部 教授) 討論者：金 光旭(成蹊大学 法学部 教授)</p> <p>全体討論</p>
司 会 者	高安 健将(CAPS 所長・法学部教授)

CAPS・朝日新聞共同企画 オンライン講演会  
「気候危機で変わる世界」  
＜オンデマンド配信・登録制＞

期 間	2021年10月25日(月)～2022年2月28日(月)
対 象	一般の方先着500名 登録者数：224名(12月15日現在)
出 演 者	稲田 信司氏(朝日新聞編集局長補佐) 財城 真寿美(成蹊大学経済学部教授・成蹊学園サステナビリティ教育研究センター所員)
司 会 者	高安 健将(CAPS 所長・法学部教授)

CAPS後援・学生主催映画上映会&シネマダイアログ  
「難民キャンプで暮らしてみたら」  
＜学内者限定＞

期 間	2021年12月11日(土) 10:00～12:30
対 象	成蹊生、成蹊学園関係者 先着30名
上映作品	「難民キャンプで暮らしてみたら」
会 場	1号館211教室
主 催	加藤 美和(法学部政治学科1年)
参加者数	12名(成蹊小学校2名、成蹊中学校2名、成蹊高校6名、成蹊大学2名)

### 2. 会議の記録

開 催 日	2021年9月22日(水)
会 議 名	企画執行委員会 (ZOOMによるオンライン会議)

### CAPS Newsletter No.153

2022年1月15日発行

編集発行：成蹊大学アジア太平洋研究センター  
〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: <https://www.seikei.ac.jp/university/caps/>

CAPS の公式ウェブサイトは  
コチラ→

